慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本人の藝能(池田彌三郎著, 日本人の生活全集7)
Sub Title	
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1957
Jtitle	史学 Vol.30, No.2 (1957. 11) ,p.129(265)- 131(267)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19571100-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

日本人の藝能（池田彌三郎著　日本人の生活全集7）

著者はいわずとしれた故折口博士の塾における後繼者。故博士の鍬入れをした民俗學的藝能史の方法を受けつぎ、創見を加えつゝ、これを積極的に押しひろげ、藝能研究の肥沃な耕土化と、その方向ずけをなしつゝある。この著者には先年既に岩崎書店より「藝能」の出版があるが、この中で著者は「藝能分類」案なるものをはじめて打ちだされ、藝能研究のあり方に強い示唆をされ、注目された。著者のこの提案に前後して本田安次氏も同じ表現になる試案を世に問われたが、本田氏が結果として示されるところの藝能個々の形式（神樂・田遊・風流・延年）を問題としようとされるに對して、著者は藝能研究それ自體の目標は日本人の生活全體にゆきわたつている藝能傳承の理論を究明する點にあるとし、從つて、その分類法も藝能に普遍してみられる民俗的諸條件を支柱とすべきであるとして、藝能の季節・舞・俳優・台本・觀客の五項目に分つている。そうしてかような分類の方法によつて藝能を蒐集・整理しながら、同時に藝能とは何かという問題に還り、藝能の發生をうかゞわんとしている。

著者のこうした藝能研究の方法論が引續き具體的に展開されたのが本書である。從つて本書でも個々の藝能の歷史的說明とか地域的分布とかは余り問題とされていない。はしがきに著者が「こうした意圖をもつた本書全體の構想は、まずつぎの「もくじ」によつて大觀していただきたい」と述べている通り「もくじ」の配列を通じても、著者の方法論の骨子が看取されよう。卽ち、まず日本人の藝能の多樣性を說く、本書の序文に當る「民族藝能」の項に續いて、第一に「藝能の季節」。こゝには、季節と神の出現・退出との關係、その神の種類と行爲、及び藝能の發生の小項目が含まれ「出現した神と、これを迎える者との宗教的な交歡の機會」が日本の藝能の發生する時であることを示し、第二に「藝能の舞台」の項目のもとでは、神出現の場所が問題にされ、屋外、境、屋内の藝能という小項目の外、舞台と觀客席という小見出しもみられる。第三に「藝能の俳優」。こゝの小項目の多くは年序階級に關係し、この階級の各層と藝能の關係が俎上にのぼつている。第四の項目、「能と觀客」の小項目には、ほめことば、あくたい、があつて所謂「招かれざる客」の信仰的關心と藝能發生時の關係が示唆され、續いて、批評と鑑賞の小見出しで、宗教的・民俗的行事が、所謂藝能化し、更に藝術へ止揚される方向を物語ろうとしている。

本書は岩崎書店の「日本人の生活全集」第七卷として書かれた

ものであるが、この全集の性格として、本書も又、二百五十余葉に及ぶ多くの變化に富んだ寫眞を掲載し、文字によつては容易に盡し難い民俗行事――藝能をこの豐富な寫眞によつていち〳〵具體的に示されて、讀者の理解を容易にしているが、前著「藝能」によつて提出された五つの分類のうち、第四の「藝能の台本」（行事次第・演目・祠章）を本書で省略されてあるのは、本書によつて從來の方法論の修正を示すのでもなく、又、必しも紙面の都合によるものでもなかろう。恐らくこの項目の内容が、寫眞による說明が比較的困難で、他の項目とのバランス、本書全體の調子を破るのを懼れたための技術的な理由によるものであると思われる。

讀者は本書を開いてまず、プロレスとかファッション・ショーといつたようなおよそ藝能とは範疇を異にすると思われる寫眞がいきなり出てきておどろかされるだろう。しかしこれは著者が讀者の意表をつくとか、學を衒おうとするとかいつたものでないことがやがて理解させられる。これは「東京の町なかの生活でも、以前は季節季節で、門づけの來訪者にも種類があつた。……門づけのしし舞などは、祝福から一部のものはたんなるものもらいに下落し、さらに、ぐれん隊狩りをのがれた連中の收容藝になつて、強迫的になつてきた」（36頁）のに代つて、人々の興奮を奪うショーやスポーツの流行を十分に著者が承知しているために他ならない。いわば精密に計算された結果の行爲なのである。上述のように著者がその分類法に從つて敍述を進めながら、藝能の過去と未來、その本質を指向し、更に日本人の民俗生活を浮出させることを意圖されているが、同時に又、いきなり讀者を藝能の世界に拉致することなしに、讀者の立場に著者自身が立つて都會的な現代的な問題にまず視點をおろし、次第に藝能本來の世界に讀者を誘導することの利點を著者は承知し、その話術をおのずから心得ているのである。そしてこのことは同時に、紙間に屢々訴えられ、就中、本書の最後の項目「藝能の危機」で述べられているように、日本人の藝能に對する愛情と表裏をなして、そのこし方、ゆく末に心を注ぐ著者の訴えの巧まざる昇華とみることも出來よう。

たゞ、この全集及び本書の標題が「日本人の……（「日本の」ではないと著者も「はしがき」でことわつている）とある以上、まさに望蜀のことといわなければなるまいが、日本人の間に傳承されてきた民俗的行事のすべてが、日本人の間にのみ育成されてきたものかどうかという讀者の疑問には 余り答えてくれていない。たとえば、「藝術の舞台」の項で觸れている棧敷・櫓などの起原も果して日本人の過去のみからで、探り出せるかどうか。少くとも日本民俗學の今後の發展がエスノロジカルな支柱なしには期待し難いと同樣に、日本人の藝能研究も又、限られた國内の領域だけでは、打開し難い袋小路に踏み込まないとも限らない。

とにかく、百草の未開の地を前にして、暗示された故折口博士

の天才的直觀を、理論體系的なものに押しひろげてゆかれる文字通り後繼者としての著者が要領よく、且つ親身に日本人の藝能を說かれたものが本書であつて、十卷を以て終る予定とされる本全集中でも、もつともユニークな價値をもつものとなることを信じて疑わない。菲才をも顧みず大方に推す所以。B5特大版　一九五七年六月刊

伊藤清司

彙報

昭和三十二年度春期史學科見學旅行記

六月二日、鎌倉見學のため北鎌倉驛に集合、一行は淺子、河北、森岡三先生はじめ先輩飯田茂登夫氏（大正十三年卒）に學生を合せて二十九名。

まず驛のすぐ傍の圓覺寺へ向う。同寺は弘安五年（一二八二年）北条時宗の開基にかかり、開山はその招聘に應じて來朝した宋の佛光禪師（無學祖元）である。寺は弘安十年以來度々火災にあい、創建當初の建造物は舍利殿（國寶）のみで、現在の建築は殆んど江戸時代のものである。圓覺興聖禪寺の額を掲げた山門も江戸時代のものではあるが、禪宗建築の特徵を余すところなく示している。ここで淺子先生より、その柱が礎盤の上に立つて粽を有すること、肘木の下端の丸味を帶びた曲線、斗栱は詰組の方式を用いていて蟇股、束の見られないこと、樋の樣式、尾樋先端が和樣のそれとちがつて鋭く尖つていること、花頭窓や扉の軸をうける藁座等細部にわたる說明をきく。山門より佛殿跡を經て舍利殿へ進む。この建物は弘安五年の造立で、わが國現存最古の禪宗建築として廣く知られているが、その美しい姿を柵越しにしか見られなかつたのはまことに殘念であつた。再び山門横へ戻つて鐘樓の丘へ登り銅鐘（重文）を見學する。この梵鐘は北条貞時が大檀那となり正安三年（一三〇一年）に鑄造されたものである。

圓覺寺より徒歩で建長寺（開基北条時賴開山宋僧蘭溪道隆）へ向う。京都般舟三昧院の建物を移建した總門巨福門を中に入ると巨大な山門が眼前に立ちふさがる。これは寶曆五年（一七五五年）の建立で、後深草天皇宸筆と傳える「建長興國禪寺」の大額を掲げた重層銅板葺の堂々たるものである。

巨福呂坂切通を經て裏參道より鶴岡八幡宮に詣り、大石段を下りて左折し鎌倉國寶館へ入る。鎌倉、神奈川縣下の社寺及び個人の寶物がこの校倉式の建物の中に保管陳列されているが、繪畫、彫刻、美術工藝品等佛教關係のものが大部分を占めている。ここで再び淺子先生から鎌倉時代の彫刻、特に佛像に關して、その樣